



写真-1 茶臼山から千種川下流部を撮影（平成 27 年 8 月）

■ 明治 25 年 7 月、未曾有の大洪水が千種川下流域を襲う

明治 25（1892）年 7 月の洪水により千種川※¹は各所で氾濫し、赤穂市域では死者 80 名、家屋の流失 527 戸、倒壊 284 戸、大破 750 戸、浸水 2,641 戸に及ぶ大水害でした。被災家屋の総数は 4,202 戸で、当時の赤穂市の戸数が 4,872 戸なので、実に総戸数の約 86%が被災したことになります。

この災害は、赤穂上空を通過した台風（977hPa：徳島測候所記録）がもたらしたもので、7 月 22 日午後から雨が散発的に降り続き、これが 23 日午前 2 時頃から暴風雨に変わり、局地的に集中豪雨となりました。姫路測候所では、この 2 日間に 404mm の雨量を記録しました。このため、千種川では 23 日 15 時頃から 22 時頃までの 7 時間に 16 箇所以上の堤防が決壊したそうです。

『赤穂市史』によると、23 日 15 時過ぎに、支川・矢野川が本川からの背水の影響で溢水し、有年村の横尾全戸 69 戸が浸水、内 32 戸が全壊・大破しました。

17 時過ぎには有年村の各所（樽原、東有年、原、牟礼東）で堤防がほぼ同時に決壊し、西有年を除いて全村浸水することに。

高雄村でも、ほぼ同時刻に根木の堤防が決壊、18 時過ぎには高雄村各地区の堤防がほぼ同時に決壊、これにより目坂、木津で計 16 名が亡くなりました。

坂越村の南野中では、下高野の堤防が 17 時過ぎに決壊、18 時過ぎには上高野の堤防が 2 箇所が決壊しました。



写真-2 明治 25 年大水害時の加里屋川（『赤穂市史』から引用）

19 時頃島田堤防が決壊、20 時頃に中道の堤防が2箇所が決壊し、多くの人が避難していた新築の家が流され、4 7 名の方が亡くなりました。

20 時20 分頃には赤穂町上飯屋の舟入堤防が170 間(≒309m)にわたり決壊し、加里屋、上飯屋のほぼ全域が浸水しました。尾崎川分派点にあった亀の甲井堰も切れてしまいました。

※1 千種川：千種川は、大治 5 (1130) 年の東大寺文書には「赤穂川」、江戸時代には「千種川」のほか、「大川」、「熊見川」などとも呼ばれた。

■ 未曾有の大災害の原因

明治 27 (1894) 年 7 月に赤穂郡役所が発行した『赤穂郡洪水史』によると、大災害を引き起こした原因を下記の 3 点としています。

- ① 山林の乱伐
- ② 川幅の狭小
- ③ 砂防工事の怠り

発災直後から多くの官吏や議員が被害調査のために被災地に入っています。兵庫県知事・周布公平はもちろんのこと、内務省衛生局長・後藤新平、内務省土木局長・古市公威^{※2}(こうい)、第四区土木監督所長で豊岡市出身の沖野忠雄の名もありました。

沖野は10 月1 日現地に入り、約1 週間かけて流域全体を巡視し、永く治水の効果を発揮させるために、洪水の流下を大きく阻害している亀の甲井堰を撤去するとともに、全川にわたり川幅を拡張する必要性を説いています。元々、亀の甲井堰の撤去は数年前に郡内の有志が計画していたこともあって、沖野の意見に意を強くしたそうです。

このような状況の中、赤穂郡長は赤穂郡全町村組合会に「千種川流域幹支派川改良起工ノ件」を諮問、以下の6 項目の抜本的対策等を提案し賛同を得ます。

- (1) 尾崎川を横断している亀の甲井堰を撤去し、熊見川と尾崎川を一本化して尾崎川を本流とする。
- (2) 千種川および各支流の井堰を改良し、流れの円滑化を図るとともに土砂の堆積を防止する。
- (3) 本堤防を補修・強化するとともに、河川敷内の本堤防以外の堤防は全て撤去し、川幅を拡張する。
- (4) 水流の障害となる岩石や土砂の河川への投棄を厳禁するとともに、現在あるものは取り除き河床を浚渫する。
- (5) 流域山林の乱伐を禁止し、土砂の流出を予防する方法を全郡一体的に施行する。
- (6) 河川敷内の耕地については代価を支給し、以後の耕作を放棄させる。

※2 古市公威：姫路藩士・古市孝の長男として嘉永 7 (1854) 年に江戸の藩屋敷で生まれる。古市は内務省土木局のトップとして全国の治水、港湾の修築のみならず、日本近代土木行政の骨格をつくるとともに、工科大学長・土木学会長・工学会の会長として、日本近代工学ならびに土木工学の制度をつくった。

■ 改良復旧のため、県へ地方税の交付を願い出、国へも国庫補助の交付申請を行う

赤穂郡町村組合会は、上記6 項目を踏まえた抜本的な改良工事を実施するため、県へ地方税の交付を願い出ました。組合会からの願い出を受けて、明治 25 (1892) 年、周布公平・兵庫県知事は臨時県議会を招集し、水害復旧工事に伴う地方税の増額および交付を提案します。しかし、松方デフレ^{※3}による不景気と相次ぐ増税で疲弊していた県民の中から、これ以上の増税には耐えられないという声が起こり、地方税増額賛成派の議員を反対派県民が取り囲むといった不穏な雰囲気となりました。

そこで、赤穂・佐用両郡選出の県会議員が千種川の抜本的な改修の必要性をまとめた資料を作成し、賛成を誇る議員の説得に努めた結果、わずか2 票の差で県の提案が可決され、約12 万円が交付されることとなりました。

一方、帝国議会に対しても国庫補助申請が行われ、12 月19 日第4 回帝国議会で約80 万円の国庫補助支給が衆議院で可決、翌日には貴族院でも原案どおり承認されました。

臨時県議会で審議されていた頃、地元では被災者への義援金や亀の甲井堰撤去工事協力の寄付金募集が活発に行われていましたが、災害で疲弊した赤穂の住民にそれほどの余裕はなく、目標額5,400 円を大きく下回る1,500 余円しか集まりませんでした。

そこで郡役所は、千種川改良工事で廃川となる熊見川河道跡地約42 町歩の払い下げを決め、この売却代金を工事協力費に充当することにしました。

※3 松方デフレ：西南戦争による戦費調達で生じたインフレーションを解消しようと、大蔵卿・松方正義が行ったデフレーション誘導の財政政策のことである。米などの農産物価格が下落し、農村の窮乏を招いた。

■ 災害からの復興に向けて～尾崎川を本流として拡幅、併せて亀の甲井堰を撤去する

国庫補助と県地方税の交付が決定すると、郡役所は直ちに改良工事に伴う用地買収に着手します。買収交渉は概ね順調に進み、明治 26（1893）年 7 月 5 日、尾崎八幡宮において千種川・亀ノ甲撤去工事の起工式が行われました。

この工事では、明治 6（1873）年すでに廃城処分となっていた赤穂城※⁴の石垣が護岸に流用されています。赤穂城二の丸門跡の案内板には、「二の丸門を挟んだ東方の東北隅櫓台から西方の北隅櫓台にかけての石垣土塁は、明治 25（1892）年千種川の洪水による災害復旧と流路変更工事において、築石として使用するため取り除かれた。」と記されています。

また、亀の甲井堰も撤去時に多くの張り石が護岸の石積に流用されました。その張り石の中に碁盤のような斑点を持つ奇石があり、地元の方がこれを「碁盤石」と名付けて、春日神社※⁵境内に保存し記念碑を建立しています（写真-5）。



写真-3 赤穂城・二の丸門
（『赤穂城史蹟名勝の探訪ガイド』から引用）



写真-4 春日神社（赤穂市南野中）



写真-5 春日神社の碁盤石（中央）と亀の甲旧石記念碑（右）

この工事により尾崎川が本流に切り替えられ、熊見川は現在の加里屋川および中広川の区域を残して埋め立てられました。図-1 において、加里屋川と中広川に挟まれた区間が熊見川の川幅でした。

切り替え工事は明治 27（1894）年 3 月に竣工しています。

なお、改修事業の全体区間は河口から約 18km 上流までで、上流は上郡村、鞍居村、赤松村、船坂村（いずれも現・上郡町）まで含まれ、これについては完成までに 30 年の歳月を費やしています。

明治 27（1894）年切り替え工事完了に伴い熊見川が廃川となり、尾崎川が千種川の本流となったことから、加里屋川は千種川水系から離脱して単独水系になりました。

しかし、昭和 51（1976）年災害を契機とした加里屋川激特事業により加里屋川から千種川への放水路が整備され、これに伴い昭和 59（1984）年 5 月、加里屋川は 90 年ぶりに千種川水系に復帰しています。

※⁴ 赤穂城：明治 6（1873）年の廃城令により赤穂城は廃城処分、すなわち大蔵省所管の普通財産に所管換えし、大蔵省において処分すべきものとなる。因みに兵庫県内では、この他に明石城、三日月陣屋、林田陣屋、龍野城、安志陣屋、三草陣屋、山崎陣屋、小野陣屋、出石城、村岡陣屋、柏原陣屋、篠山城が廃城処分となった。

※⁵ 春日神社：祭神は天児屋根命（あめのこやねのみこと）で、南野中の鎮守の神として祀られている。境内には水神社と金比羅社がある。金比羅社は、かつては亀の甲井堰の堤防上にあったものを合祀したものである。

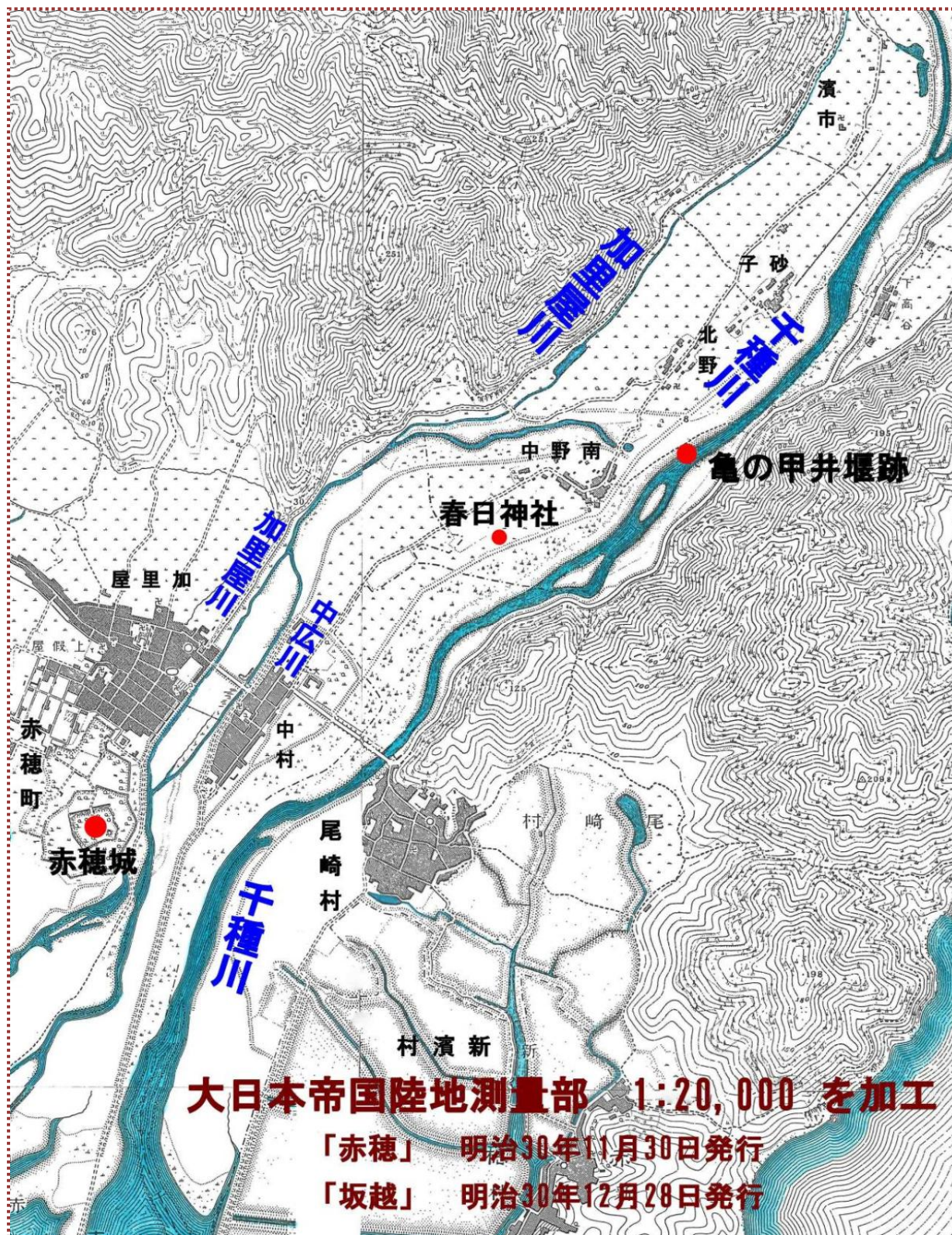


図-1 明治 30 年頃の千種川下流部

■ 明治 25 年以來の大災害～昭和 51 年災害

昭和 51 (1976) 年 9 月 8 日から 13 日にかけて台風 17 号および秋雨前線による豪雨で、6 日間の総雨量が上郡で 834mm、赤穂で 861mm、相生で 936mm を記録しました。実に年間総雨量の半分以上の雨がこの 6 日間に降ったわけで、西播磨地域を中心に大きな被害をもたらし、千種川水系においても明治 25 (1892) 年以來の大災害になりました。筆者も当時、上郡土木事務所工務第二課にいてこの災害を経験しました。県に入って最初の現場で、ようやく現場の仕事に慣れてきた頃です。

昭和 51（1976）年 9 月 8 日朝、筆者は神戸の実家を出て、マイカーで勤務先の上郡土木事務所へ向かう。前日、県庁に出張し、夜友人と酒を飲みすぎたようで、朝起きるとまだ頭がボーッとしている（いつものことではあるが……）。

午前中休暇をとっていたので、昼までに職場に着けばいい。天気は快晴、ぼけた頭もそのうちスッキリするだろうと出発したものの、姫路で雨になり、竜野

に入って豪雨、そして主要地方道・姫路上郡線、通称“ヒメカミ”の椿峠（相生市と上郡町との境界）にさしかかった時、あまりにも激しい雨でワイパーを速く動かしても前がよく見えず、やむなくライトを点けたまま車を止めて様子を見ることにした。しかし、2、3分待っても一向におさまる気配もない。この県道は当時まだ未改良の箇所、幅員も狭く道の両側の斜面がもし崩れてきたらヤバイ、と不安がよぎる。仕方なくライトを点けたまま、トロトロと徐行運転でなんとか事務所までたどりついたら、水防指令 3 号（全員待機）がすでに出ていた。

その日の夜はたしか中秋の名月のはずで、下宿先（赤穂市有年橋原）のおばあちゃんと月見をすることになっていたが、当然月など出ているはずもなく、その日から 5 日間ぶっ通しで事務所に寝泊りする羽目に。会議机を並べて、その上に毛布を敷いて寝たような記憶がある。デリケートなせい、固い机の上では熟睡できない。しかし 3 日目を過ぎると疲れているせい、かボタン・キュー。

水防の指導班に入っていた関係で、班長の指示で安室川下流の竹万（ちくま）や千種川の与井新での水防活動現場に行ったが、特に出番もなく（あったとしても 26 歳の若造ではほとんど役にたたず）、知識として持っていた“竹流し”や“月の輪工法”が水防団によって手際よく行われているのを見て妙に感動したものだ。

事務所の前を流れている千種川はうねりがすごく（当時の上郡土木事務所は上郡大橋の上流右岸にあった）、上郡大橋や隈見橋の橋桁を濁流が洗っていて、落橋のおそれがあったことから一時通行止めになった。事務所前の堤防に立っていると、川の中央付近のうねりが堤防よりも高いように見えて恐怖を覚えた。降り続いた雨も 13 日には小降りになり、ようやく下宿先へ帰ることができた。

しかし、雨が止んでほっとしてはいけない。ほんとうに大変なのはこれからである。さっそく翌日から被害状況を調査するためカメラと野帳を持って現場へ。被害状況報告が終わると、今度は災害を拾うために 3 人一組で朝から夕方まで災害調査だ。ポール横断、見取り平面、写真撮影等の作業を分担して行い、夜になると昼間とったデータをもとに設計図面を作成し（今のような外注ではない）、査定設計書を作成するという毎日の連続。電車通勤の人は最終の電車で帰り、筆者のような独身の車通勤組は 24 時過ぎまで残業の毎日が続く。まさに体力勝負の日々である。

たしか 10 月頃だった。工務第一課の 1 主査が、「こんな状態が続いたら体をこわすから、せめて月に 1 回だけ日曜日に休もうや。」と提案され、さっそく次の日曜は全員休むこととなった。

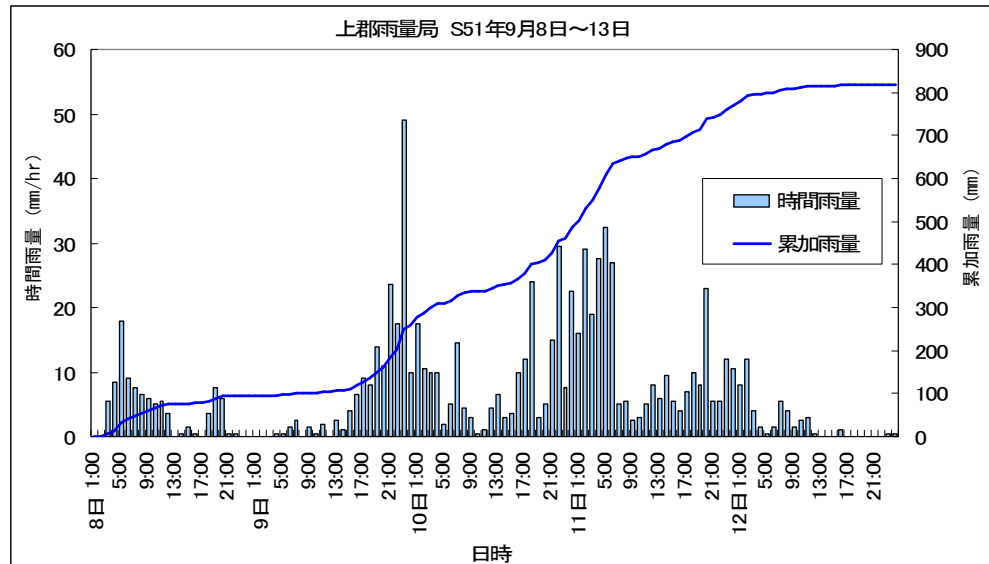


表-1 昭和 51 年災害の上郡雨量局の降雨実績



写真-6 千種川が決壊した昭和 51 年災害
（『兵庫の河川 50 年のあゆみ』から引用）

10月16日付けで応援部隊に辞令が出て、多くの方がそのまま上郡土木事務所勤務となる。このとき、筆者が所属していた工務第二課は、T課長以下総勢15名の大所帯となる。

こんな異常な状況が翌年の1月末まで続いた。それ以降は少し落ち着いてきて、毎日21時頃には帰れるようになった。

■ モノローグ

早いもので、昭和51(1976)年災害からもうすぐ50年になります。筆者にとってこの水害は、現場にいて経験した最初で最後の大水害です。その後、災害復興に携わったメンバーが集まって年に1回飲み会をやってきましたが、10年ほど前に員が退職し、現役はいなくなりました。そして、残念なことにすでに7名の方が鬼籍に入(い)っています。

災害の記憶も年とともにどんどん薄れていきますが、今回千種川の明治25(1892)年災害をきっかけに、昭和51(1976)年災害を思い返してみました。しんどかったけれど、振り返ってみると結構楽しい思い出になっています。

全国屈指の新幹線撮影スポット

写真-7は、千種川に架かる高雄橋(一般県道459号・周世尾崎線)から千種川橋梁を渡る山陽新幹線を撮影したものです。ここは、鉄道ファンの間では有名な場所で、以前、JR西日本・新幹線のCMにも使われたことがあります。

川面に映る新幹線を撮ることができるのは、岡山県の吉井川とここぐらいだそうです。高雄橋直下の井堰によって静水面が形成されているためと思われますが、中洲の形成で静水面はかなり減少しています。

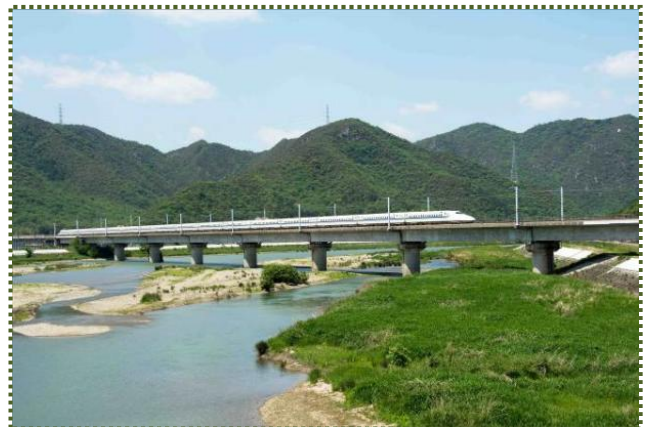


写真-7 千種川に架かる高雄橋から山陽新幹線を撮影
(平成26年5月撮影)

【参考資料】

- 1 『赤穂市史・第三巻 通史一近・現代』 赤穂市史編さん専門委員編 昭和60年12月
- 2 『明治二十五年赤穂郡洪水史』 赤穂郡役所 明治27年7月
- 3 『文化財をたずねて～No.12』 赤穂市教育委員会 平成15年3月
- 4 『赤穂城を歩いてみよう！～赤穂城史蹟名勝の探訪ガイド』 赤穂市教育委員会 生涯学習課文化財係 平成21年3月
- 5 『古市公威』 フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

※発行：平成29(2017)年1月 『ひょうご水百景』No.68

改訂：令和8(2026)年6月 『ひょうご水百景』No.68